

# 香川宣阿加点詠草（下）

## 付、香川景新加点詠草

神作 研一

### 解題

前稿<sup>①</sup>を承けて、本稿にも、元禄期の上方地下歌人香川宣阿（正保四年（一六四七）生、享保二〇年（一七三五）九月二二日没。八九歳）による添削資料を収載する。影印と翻印、全一七点（すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵）。配列は、先ず年次の判明するもの（一一点）をおき、次いで年次未詳のもの（六点）を並べ、順にF、Vの記号を付した。IとMの本文については既に別稿<sup>②</sup>にて紹介済みだが、ここに宣阿加点の全資料を一覧・掲出させた方が研究上有用だと判断して再録した。

また、富加町郷土資料館には、宣阿息景新<sup>（かげちか）</sup>（延宝六年（一六七八）生、元文四年（一七三九）一月二二日没。六二歳）による加点資料（享保二年七月）がたった一点だけだが所蔵されているので、それをWとして添えた。景新は、父の跡を継いで京都梅月堂二代として名を遣したが、実際の和歌活動はそれほど知られてはいない。宣阿以上にそっけない添削ゆえ、冬音らの歌心を擱めなかつた如くであるが、併

せてここにその本文を紹介しておきたい。

さて、それら都合一八点の資料の書誌的概要は次の通りである（アルファベット次段（ ）内の算用数字は『美濃加治田 平井家文藝資料分類目録』<sup>③</sup>の通し番号）。

#### F (356) 冬音和歌三十首

\* 正徳四年、香川宣阿点（六八歳）。

\* 12 / 21。

折紙仮綴一冊。縦一五、三糎×横二七、一糎。楮紙。冬音詠。奥書ナシ。端書「梅月堂宣阿加筆正徳四午年」（奥ニアリ）。

#### G (357) 冬音和歌百首

\* 正徳四年、香川宣阿点（六八歳）。

\* 12 / 119 / 155。

継紙五通。縦一五、六糎×横七四三、九糎。楮紙（総裏打）。冬音詠。奥書ナシ。端裏「梅月堂加筆正徳四午年」。

#### H (358) 冬音和歌十六首

\* 正徳五年、香川宣阿点（六九歳）。

\* 12 / 172。

継紙一通。縦一五、二糎×横一四四、四糎。楮紙。冬音詠。

奥書「合点十首／何も面白珍重」／宣阿(花押)。端裏「梅月堂加筆正徳五年末」。

## I (359) 副雄等和歌三十首

\* 正徳五年、香川宣阿点(六九歳)。

継紙一通。縦一五、二糰×横二五二、二糰。楮紙。副雄・常観・冬音・仙庵詠。奥書「点十六首／此一巻近來之内／別而御秀逸／珍重」／宣阿(花押)。端裏「宣阿加筆正徳五年末」。

## J (360) 副雄等和歌三十首

\* 正徳六年春、香川宣阿点(七〇歳)。

継紙一通。縦一五、三糰×横二一六、七糰。楮紙。副雄・仙庵・冬音詠。奥書「合点十九首／何も面白珍重」／宣阿(花押)。端裏「梅月堂加筆正徳六申春」。

## K (361) 仙庵等和歌十六首

\* 享保元年、香川宣阿点(七〇歳)。

継紙一通。縦一四、九糰×横一六九、二糰。楮紙。仙庵・冬音詠。奥書「合点八首／此巻別而宜敷／珍重」／宣阿(花押)。端裏「宣阿加筆享保元丙申」。

## L (362) 冬音和歌十二首

\* 享保元年夏、香川宣阿点(七〇歳)。

継紙一通。縦一四、五糰×横一四八、〇糰。楮紙。冬音詠。奥書「合点九首／右何も面白珍重」／宣阿(花押)。端裏「宣阿加筆享保元丙申夏」。

## M (363) 冬音和歌二十首

\* 享保元年七月、香川宣阿点(七〇歳)。

継紙一通。縦一四、八糰×横一八六、四糰。楮紙。冬音詠。奥書ナシ。端裏「享保元年申ノ七月日梅月堂加筆」。

## N (369) 冬音和歌十首

\* 享保元年冬、香川宣阿点(七〇歳)。

折紙一通。縦三〇、八糰×横四四、四糰。楮紙。冬音詠。奥書「合点八首／何も面白珍重」／宣阿(花押)。端書「享保元申冬梅月堂吟味」。

## O (364) 冬音和歌十首

\* 享保二年七月、香川宣阿点(七一歳)。

折紙一通。縦三三、〇糰×横四五、四糰。楮紙。冬音詠。奥書「合点七首／何も面白珍重」／宣阿(花押)。端書「享保第二丁西夷則梅月翁宣阿点」。

## P (365) 冬音和歌十五首

\* 享保二年一二月、香川宣阿点(七一歳)。

継紙一通。縦一五、五糰×横一三二、九糰。楮紙。冬音詠。奥書「合点十一首／何も面白珍重」／宣阿(花押)。端裏「丁酉臘宣阿点」。

## Q (366) 冬音和歌二十一首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

継紙一通。縦一五、四糰×横一五八、五糰。楮紙。冬音詠。奥書「合点十五首／何も面白御詠共／御工夫御升進／大二珍

重く／宣阿（花押）。端裏「上部破レ」宣阿点。巻首上  
部少破レ。

R (367) 冬音和歌十二首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

\* 12 / 13。

折紙一通。縦三一、三糰×横四三、二糰。楮紙。冬音詠。奥  
書「愚点十首／何も面白風体好／珍重く／宣阿（花押）。  
端裏ナシ。

S (368) 冬音和歌十首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

\* 12 / 14。

折紙一通。縦三一、二糰×横四三、三糰。楮紙。冬音詠。奥  
書「愚点八首／何も珍重く／宣阿（花押）。端裏ナシ。

T (370) 冬音和歌十首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

\* 12 / 326。

折紙一通。縦三一、二糰×横四三、二糰。楮紙。冬音詠。奥  
書「八点／何も別而珍重く／宣阿（花押）。端裏ナシ。

U (371) 冬音和歌二首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

\* 12 / 18。

切紙一通。縦一六、三糰×横二三、四糰。奉書紙。冬音詠。  
奥書「皆之／何も珍重く／宣阿」。端裏ナシ。

V (372) 冬音・仙庵和歌十三首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

\* 12 / 165。

継紙一通。縦一五、四糰×横一三六、五糰。楮紙。冬音・仙  
庵詠。奥書「合点十二首／何も面白別而将又／六かしき題御

秀逸／珍重く／宣阿（花押）。端裏、前欠（破レ）ゆえ不  
明。前欠（破レ）。

W (373) 冬音和歌十首

\* 享保二年七月、香川景新点（四〇歳）。

\* 12 / 12。

継紙一通。縦三〇、八糰×横四四、四糰。楮紙。冬音詠。奥  
書ナシ。端書「享保二西夷則景新加筆」（奥ニアリ）。

なお、翻印にあたっては、これまでの方針をおおむね踏襲した。詳  
細は次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

(1) 拙稿「香川宣阿加点点詠草（上）」（本誌五巻二号、二〇〇九・三）。

(2) 拙稿「元禄期歌人の添削資料」（本誌一巻一・二合併号、二〇〇五・三）。

(3) 加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、二〇〇五刊。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に篤く御礼を申し上げ  
る。

（かんさく・けんいち 本学文学部教授）

凡例

- 一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白を切り継いだところがある（紙面の都合上、折紙も適宜切り継いだ）。
- 一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。
- 一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。
- 一、評語は「 $\wedge$ 」 $\wedge$ 内にくるんで掲出し、適宜句読点、引用符（「 $\wedge$ 」）を施した。
- 一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。
- 一、漢字は、適宜通行の字体に改めた。
- 一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は、□で示した。
- 一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜（ママ）と注記した。
- 一、「 $\wedge$ 」内は、神作による注記である。

〈影印編〉

F 冬音和歌三十首

\* 正徳四年、香川宣阿点。

(端書)

梅りき宣阿阿も正徳四年

1 打むしうい鹿のたらし欠て  
もの三叶せもの池のうら波  
梅並枕 とまら 阿

2 さしぬる 国の板も吹合て  
まうにかほる 梅の下凡  
春月

3 涙にハ多岐もくれ言の板へ  
かすみの袖いつる月気

詠三十首 和歌

正徳四年上

4 後へれせぬ花の夜香かよした  
河くやまやま言の山りり  
梅花

5 涙初くぬの夫にうらひ  
いへハ重く奉のまう雲  
梅花

6 おるん 梢のまきいろに  
せらく初らむのむの白音  
野下草

7 長閑かおれたる石の須良  
多しむく空にひらり鳴なり  
時多

8 三つに人本あとのむと息そ  
清待せけし山ほくま  
五月雨

9 三三の川葉舟の波も五月あれ  
ひるにハと割て成行

10 何れ水に移り火を神さるも  
とくくゆるるにたれあらん  
七ツ

11 田のまけりうて天乃川  
二よあし 雨や割やあらん  
女席花

12 分り持いらぬく跡への女花  
五ツ 花のちかこさうそ  
園鹿

13 人目もまのうの無の秋日に  
言て草ささゆーの草  
西下草

14 か夜すその方にねま  
人深いのまやうあらん  
侍月

15 山の鳥の中をいづくあくに  
まらいつる人月の影もく

16

跡上月  
海の海やちら運にまじり月ハ  
氷やまゝの味ハよみ人

17

持衣  
おのの三雅に染くかゝらま  
いも依金の月にうらん

18

時五  
降つぬ山のものでいく久かり  
時五に引くそ一持衣あき

19

嘆子  
糸糸ついでい長そありゆけれ  
月のこゝろにまもあくら

20

灰毫  
汗末に雪月のそにま清く  
煙さい一きす地のすまは

21

悪意  
うまけふふみとれにせきそ  
人月このの神のよもま

22

不巻  
お下と波の碇世のかう貝  
心持物ぢよ身をいよせん

23

備  
こん汗便まをいれおま  
うまぢむらうまよばいも

24

初産  
あい初く今さし替る昔まか  
ほまかひへへへへのま

25

祈  
限不れをりぬんは海ま鳴ま  
まよのまかたきんへへま

26

暎  
水垂灯虫のくれまや月  
いさうまの救そまい行

27

絶  
あまろく失そいつの救そ  
今まろく頼すまま

28

古寺鐘  
西へさうらまのそけり懸れ  
そのもや一れ入相のめ

29

旅行  
帰るままこのそま白や成  
今まそ二何ありの山

30

神祇  
神葉に通そ房の光ま  
涙は昔の乳そくもな

梅のそま海のそま正任四子奇

G 冬音和歌百首

\* 正徳四年、香川宣阿点。

(端裏) 梅月堂加予正徳四年

梅月堂加予正徳四年  
誦百首和歌



立春

冬音上

1 春を  
待むる志たれ雲の如く  
ゆく神作の雲はまよふ

朝霞

2 朝霞く月引山の山もせに  
日影障くたけ霞哉

谷鳴

3 谷中春より初く谷に  
音にたるとぬうまの音

晴雪

4 雨もみもれ葉のあまむく  
またくに降る雪人の白鳥

春菜

5 三叶初流の氷けひる毎に  
二葉れもかかすてはけむ

里梅

6 里に梅ももろ寸天け凡  
さそく秋も香も白鳥も

春月

7 春より人もはけし月影も  
月くれぬ朝の梅の下に

春月

8 春から心通るたると人  
月影のうれあし人

書壁

9 和衣は袖や訂のはも三かへ  
やんま詠の書のおけふの

帰扇

10 扇のころころは書は扇  
にけみ捨く何いそくん

書雨

11 かぶりの空もえく寸降初  
辰とけかす将の春の夜

辰柳

12 辰の根の水は氣もめて  
書の色も青柳のいと

書壁

13 何よもたさくえもあふれ  
に待書はくろけく

初巻

14 折や尺まは心よこりぬれ

初巻のまきとそれと斗も

見れば

15 世はけき道行方ハ涙花

こころれまにみろの真

二巻

16 嘆てちる習もこれかあるれ

こころれまにみろの真

三巻

17 凡誘ふ言の色香も氷江川

尺よにあふ成花のまてあそ

四巻

18 言凡よ白く又毛玉川ハ

たすやこほく山吹の扇

池友

19 嘆てちる行のまは行もれ

うもむと池のなまこ

三巻

20 うふゆのまはれくむと花もれ

色香も枝のま言行書

更夜

21 香もりハ心も薄きぬきこ

まはれくまのなまこ

分巻

22 月々の三詠と程もうれれ

かけ明やすきみ

侍女親

23 あくも習もれまほりせん

侍り初巻を扱はれまきぬ

中巻

24 中巻のまはれくむと花もれ

まはれ外成山ほりま

初巻

25 たすのまはれくむと花もれ

まはれ外成山ほりま

更夜

26 玉もれと花もれまはれ

まはれ外成山ほりま

分巻

27 尺月のまはれくむと花もれ

まはれ外成山ほりま

更夜

28 ぬれかす涙もはれまはれ

たみの、清ハ水月花



橋川

29 毎火もききてい達ようふまや

すまふもさうふ成人

書望

30 夏晴て夏なま庭は草ひや

風よわさむれ病共みそ

夏草

31 志けりあふ跡され神もなきて

病よわほも夏草乃花

夏月

32 清いほの山のあるれ一遍り

晴く涼き夏の夜月

夕立

33 尺さうちにくる雨くく村をわ

山のよきあもゆるもれ立

杜宇

34 夏きやわら悲の表は夕風

別く涼し春の夕風

夏後

35 夕風は蝶や虫ふみまき川

夏のゆれとあまのこやゆ

早秋

36 吹くに月まふぬおの表は秋

かひくく月もあつ蜂の初風

七夕

37 天川岸の縁をわたりかきこ

こころをちよと星を合空

二秋風

38 夕てたは妹の袂は秋風

さよはけは秋の上風

二秋風

39 二日色ても日く綿やふ秋風

扇分神の二秋風死すり

書望

40 神ちと藤や三とふふ秋風

こらけの人れみみわすり

夕虫

41 夕のまはくあふぬとまりに

何事芽生の病まかりん

夏麻

42 夏の根は長よあすく暗麻を

いよは新麻きつるあまこらん

初風

43 夕風山のかくくの中をけり

沢を三見はまもろく風の声

燂夕

三言

44

ひて終る衣は守りて夕ま  
けふたあはれ燂の夕ま

山月

45

詩書心のまにうきても  
晴てあはれ山月の

野月

46

笑する花の露も色あは  
くうううう  
詠くはけき社のね月

何月

47

けきより志玉の玉はあ  
り凡きういけ月氣

何月

48

打鐘指は必しあはれや  
むし何月のあはれん

浦月

49

浦月には波送は平ら暗く  
月長井の浦月吹

薙菜

50

うけ桂一葉も燂の夕ま  
まうねの鳥は白くうう葉

持衣

51

燂の女は女もと割る夜交  
打明日衣や露玉あはれん

曉書

52

五匹也買のたけて暗身に  
神元何れききはれ神書

恩仁葉

53

旅人の袖も女はうり氣  
さすや作本れ是の仁葉

庭おま

54

燂も紅くうり初く  
あはれもむ庭のあはれ

九り

55

うけ桂一葉も燂の夕ま  
うと限りの燂の夕ま

初衣

56

うけ燂の言吹く今朝も  
冬よあはれ神の仲の松風

時衣

57

あはれあはれ神の氣と雲風に  
いくたい分れ何あはれん

三葉

58

燂もくも何あはれん  
あはれやうく本の葉あはれん



朝病

59 花風の音は疎しく世の葉に

まよふ今朝の夜を定けき

定夜

60 夕言はうら方にまよひ寝て

夜夢さうも庭の二粒京

夕夢

61 玉川や美汝の月は鏡更く

書かふふも声うらむらん

水守

62 池水の深き思はれ小夜枕

あけくさむれはむえのまじ

水羽結

63 与後る竹のけいひのたまり水

よの月と定み水初らん

夕月

64 板石も老いずや小夜一も

かこもくも秋夕の月就

鷹狩

65 侍介もよれ床草を寝せ

夕の西野の月は成す

野叢

66 茶の葉の三羽やとく玉露

布衣野原の夕の夕けき

侍言

67 次侍の風は雲を巻さく

まじりては庭の初言

積言

68 下折の竹のよるに積言て

山と積言言はれけいの

玉手書

69 林あり夕と玉欠て積言ふ

まじり人松の下庭

野言

70 春はうら味はけきと別一

夕の夕野さ年の言哉

夕月出

71 今夕の心はけりよ侍言

かめ久く定れ夕月の就

一書

72 夕の夕野の夕もかよらん

夕の夕野の夕もかよらん

一書

73 消茶ん暖けくも言く

夕の夕野の夕もかよらん



74

柳枝ふりの空れりるを  
秋風を降初りりれ

一葉

75

まよから垣根のまよを恨人を  
みよふまよき 蝶風花吹

一葉

76

こむくて今や心の花は  
このものまよあぬ思ひ

一葉

77

あさる室のたもとをけて  
あふちゆり人月さん

一葉

78

初田の原立たはのまよを  
おもひみるも八重のふか

一葉

79

丑祓の朝の神といともすよ  
庭と別の小路の隆原

一葉

80

神子と雲り一と申室よ  
いづれも成之まよを

一葉

81

ぬれぼと便滴のまよを  
いはの月よ小志海さん

一葉

82

生る色も白もいとけし  
乃汝言里此朝の下ま

一葉

83

あむ祓の心ゆよまよを  
あむ初庵の月よまよ

一葉

84

初史づくろがく一葉よ  
あむ乱思をさくふの系

一葉

85

てふまに独外掃のまよを  
あむあむのまよをけく感

一葉

86

絶てのまよのまよを  
かさのまよにうけ一葉も

一葉

87

あきかま清の清気とて  
いよふられ庭井あきと

一葉

88

人ハニすけのまよを  
あむあむのまよを

一葉

89 一係一  
世のふゆふゆと流るる小舟  
かきこもれ 神のせせき  
90 一係一  
弘く末のあつてもかくまの  
けりきききききききききき  
浦松  
91 一係一  
毛いかく煙と流るるかき  
ばよししし三係の浦松  
92 一係一  
世のふゆふゆと流るる小舟  
93 一係一  
世のふゆふゆと流るる小舟

94 田家  
まふも飽てあつたの凡ゆる  
山田のり高月やまらん  
95 一係一  
まふも飽てあつたの凡ゆる  
い言社と志望の古里  
海路  
96 一係一  
仲津取港行末と志望の古里  
97 一係一  
世のふゆふゆと流るる小舟  
98 一係一  
世のふゆふゆと流るる小舟

99 神橋  
天の下に流るる流るる  
99 一係一  
神橋  
100 一係一  
神橋

H 冬音和歌十六首

\* 正徳五年、香川宣阿点。

(端裏) 梅りたもき正徳五年末

1  
 早秋曉露  
 平井冬音上

詠十首和詩

2  
 霜外夕夷

夕々れ小の露原まのす  
 あまのつゆのきあきん  
 あまのつゆのきあきん

3  
 嶺上月明

4  
 月前所來

5  
 海音持衣

6  
 依懸増衣

7  
 契不逢

8  
 今朝行恨もさや思ひつ  
 又秋の床れあゝるあゆみ

9  
 草枕をさゝる身付たゆま  
 昔夜寝るも思ひあきす

10  
 社外去久

11  
 寒草

8  
 梅朝怨

9  
 社外去久

10  
 冬日三首題  
 冬音上

11  
 寒草

12 氷  
 さうに併ま霜の東京  
 氷  
 さうに併ま霜の東京  
 13  
 三つ白や折れ戸のと氷  
 14  
 雪  
 15  
 16  
 何れか  
 真高

1 誅三十首和歌  
 頃成  
 2  
 1  
 横やれ  
 山の端  
 2  
 木の端

1 副雄等 和歌三十首  
 \* 正徳五年、香川宣阿点。  
 (端裏) 遺物如正徳五年

海防序  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 樹花

8 瀟瀟と音も又くも本陣よ

行りねへて味うれも 天

雨友輝

9 雨友輝のわよこもあま

なましくもく輝の法聲 仙

10 夕三れは秋の露に鳴せしの

聲 甲流しよ衣半袂 仙

雨庭友

11 まつやと向きね庭を秋草に

心の中もれあふゆつる 天

12 雨こありて今 世はあも今更

て流をみく 流もあもあ 天

の御月

13 波はれを秋のいろ 仙

は乃庭も秋のいろ 仙

14 眺るあまはくして 仙

むりよ下れ 仙

汀路紅葉

15 引はて流し 楓は合のそ

袖ま 秋のいろは 仙

16 玉流のたり人の 神はま

たに しの流は 仙

落葉

17 吹流し 音は内も 天

あり 淋し 才 天

18 しと朝足も 天

天 天

来道

19 いつこも 天

天 天

20 引はて 天

天 天

道立

21 いるあは 天

天 天

22 けいり 天

天 天



別表

23 たいひせく湖入る木柵くに

まねくわろまよ姫の袖

24 まえあひの昔ま日いひい

別一會て何びの昔人

幸灯志

25 宮上り明行園より火れ

まのむけはひきす

26 清流くひきまを流す灯を

りてたもあつまわ

燈

27 何事やまて今ふ方よし

むくは用る古言は燈

28 谷木柵の打もまはは籠て

目いむくま南朝をまき

神

29 神垣を隔りあし柳葉は

鳥か一羽も家へまはし

30 別早振神代のもに柳葉を

まひしきまの春を

五七五

けてそら春南

川をまわ

五七五

J 副雄等和歌三十首

\* 正徳六年春、香川宣阿点。

(端裏) 正徳六年春、香川宣阿点。

正徳六年春、香川宣阿点。

22  
201

副三十首和歌

山本副雄上  
長沼仙卷上  
平井冬音上

早春霞

1 きのふあまの浦を

は海をよるふり

2 音かゝる今朝の衣きて

春あつりまよ姫の袖

3 眼の今波のむらり

海京とゆく

静見光

4 嘆も志夫の行春はハ  
 5 心入 敬方をよめ  
 6 長因成り氣をれをのよれ  
 7 一巻よぬのさ行又まほは  
 8 五草は清き野趣と静  
 9 子規のりれ波をむ月け  
 氣やきこひん 春風うき

深夜宮

10 五草は清き野趣と静  
 11 音も立ぬおのいそほま  
 12 更なるに静と音のたひ川  
 13 空川は清き野趣と静  
 14 海邊月  
 15 秋の光よ  
 氣やきこひん 春風うき

山紅葉

16 山紅葉の光よ  
 17 秋の光よ  
 18 山紅葉の光よ  
 19 山紅葉の光よ  
 20 山紅葉の光よ  
 21 山紅葉の光よ

風頭雲

22

風物の國はたゞとて言はれど  
原一とて世に波東絶を愛

23

移れぬ道もはたの國はたや  
言ふたともな相坂のよ

24

清きとてれもといつゝふら  
不破の國をれ訴は喜ん

五清哀

25

清きぬ人も言へば法れよ  
三のよとてな板れまるとい

26

色よとて新のまよふは風の袖  
ぬれぬきぬ。清きいん

27

まよふとて清き相うは秋夜  
人目よとては涙かこらん

稀道恋

28

打けく又いつゝを法しは  
あまよれぬとて神の下母

29

契いぬと神とては初めを  
れは唐のよとて契を

30

思いつ恨と解く七つれ  
契よまるとて板の下母

合果十九首

何れもは法しは

真

K 仙庵等和歌十六首

\* 享保元年、香川宣阿点。

(端裏) 香川宣阿点享保元年丙申

仙庵等和歌十六首



長谷川庵と  
三井寺書し

尊為友

1

新中又なは英と水きり  
慰とて清き言れよ

真

2

関切く今更なはなを  
切漏れぬとて言れよ

3

別河のふたせきとて一筋の  
なれどななるおの宮  
河

4

梅くみしんは東の宮  
うすの おの 東の宮

5

清正  
柳凡

長閑風か春と春若緑  
まじ あはれ 春柳は枝

6

春風 あはれ 秋夜なむと  
あはれ あはれ 春柳の葉

7

月前毒

梅くは白ひなゆふ 梅の葉  
ま枝 く り あはれ 月

8

あはれ  
月海 あはれ 木の乃 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

9

霞平清

空迎く あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

10

年 あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

11

夜思也

梅 あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

12

永 あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

13

春神祇

春 あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

14

天下 あはれ 月 あはれ 梅  
あはれ あはれ 月

16

15

春祝

和早海の志願の葉に  
 神代の花の根をくまはら  
 まゆる春花の心は  
 移らぬ神代の風を  
 念念八音  
 山平州の春  
 空

L 冬音和歌十二首

\* 享保元年夏、香川宣阿点。  
 (端裏) 宣阿卿享保元年丙申夏

詠十二首和詩

蕭樹霞

享保元年上

1 空に立香川初香川音香川空香川  
 岸上の松平基地深えり

2 長閑な春の空あり  
 湖水の音

3 窓前梅

引きたる袖の梅の枝  
 ちげ吹こりて窓の春風

4 月前梅

霞は心さそふ梅の  
 月々吾は梅春の心合

5 雨申春草

雨の音は春の心  
 草の萌ゆる春の心

山を如錦

山を如錦の神折る詠  
山を如錦を詠の詠

6

慕春興

朋とを言の教も

松の戸も

7

寄懐慈

後めやはけく言せなく  
見

8

獨りし別り別り習ひ  
お

心迷もけ嘆の水

来朝一

黒髪もみくれ行中  
流連ね  
けの床も残る詠

9

来書一

山を如錦の口へ神めさく

10

来夕一

秋の風も人ひめさく

11

東女へを言ひたりか  
物なり

ゆへへの言も西氣なり

来夜一

家なるを言ひたりか  
人

12

又いなりなるね平の思ひ  
人

合點九言

在りたり

豆野

M 冬音和歌二十首

\* 享保元年七月、香川宣阿点。

(端裏) 享保元年申七月一日、御一七の字

歌二首和綺

1 西向郭云  
兼音上  
殊更あまののうらと志と時暮  
雪の絶回空を主に次初音入

2 江中菖蒲  
風なの水のみもりと雪のみも  
ならずと菖蒲は花を流す

3 門田早苗  
世なのあの心を斬り花  
こいて門田一早苗入

4 陵田又照行  
安床の目合れ程は難思也  
せり世の金の小明行

5 新丹月雨  
常のの昔入辛に雪初と  
うらは作未青の市

6 寝病水難  
中馴くぬと中の夜なら  
任笑ときと小勢如也

7 葦中螢火  
世のあの心を斬り花を  
こいて門田一早苗入

8 毎夜鶏引  
清とせりときと小勢如也  
毎夜の心を斬り花  
こいて門田一早苗入

9 池と蓮  
よる夜と玉ととり地水と  
んびみく露の蓮葉

10 林江蟬  
張浮小島は昔の文札也  
精江とりとり蟬の語聲

11 果初草薺  
清とせりときと小勢如也  
とりとりとり下の具也

12 高思草一  
 柿下は杓果をゆき  
 新丹老のふり葉の春に

13 家思草一  
 うづねと海をこころの思草  
 たりやまのこもれもよし

14 高下草一  
 わりやうやうはたの金草  
 時ふとほねをまろ下草

15 高下草一  
 佐下もふき福や藤  
 岸根もまろ高下草

16 兜遊情  
 長舌と度入りの雪  
 初見のふく神の目  
初見のふく神の目  
 初見のふく神の目  
 初見のふく神の目

17 夕遊思  
 物たひまはれまきふ  
 夕歌いより果の雪

18 雪浮野水  
 立ぬる雪その水は草か  
 しよ中と乱とひら

19 松音詩  
 草花結びもをる草  
 多の松や松とらる

20 寄神祝  
 治まるとやしの恵は  
 けりて地杯の神の白

1 朝雪  
 雪はあけをさへひらけ  
 雪はあけをさへひらけ  
 雪はあけをさへひらけ

2 夕雪  
 心の隅に雪とて  
 雪とて雪とて雪とて

3 夜雪  
 雪はあけをさへひらけ  
 雪はあけをさへひらけ

詠十首和歌  
 平冬音上

N 冬音和歌十首  
 \* 享保元年冬、香川宣阿点。  
 (端書) 宣阿之申之御月音上



4 白雪  
色更して降程もかき研れ  
降よりか雪の白き  
雪の降るは白すか吹りて  
白く

5 新雪  
面敷ハ行りたる深草や  
痛より後の野趣ハ白雪  
先

6 因雪  
雪の下は白くはるの  
母の草根も積もみ雪に  
その下は白くはるの  
雪の降るは白すか吹りて  
白く

7 浦雪  
雪はな津の浦の眺き  
雪

8 川雪  
岩方く氷まるとに色せて  
行り雪ハぬる川ハ水

9 雪雪  
降すに凡ハくはり下  
松の葉は  
色もけまかく積も雪ハ

10 竹雪  
降埋む秋の友雪の考肉や  
下りては 斬る竹  
竹  
竹をわらふ  
真実

1 吹風ハ涼きいふ友衣  
むの白いもわはれさきに  
身  
新樹  
別葉守りたる深草の  
みよのをさるる庭ハ友  
雪

2 暁子歌  
天の戸も押明を此時  
海きぬくに鳴りし沈

3 詠十首和歌  
其海舟は  
雪行軒離冬者上  
仁 027

重保二年七月、香川宣阿点  
(端書) 重保二年七月、香川宣阿点

〇 冬音和歌十首

\* 享保二年七月、香川宣阿点。

(端書) 重保二年七月、香川宣阿点

8 恨一  
別て今うむとや月影  
らぬいふも入る心一

7 不意一  
又も秋の月に懐想月影  
いつの中身に矢張りあつた

6 初恋  
迷ふも懐想月影の心  
行ひ初想月影の心

5 乙女月  
雨夜を懐く乙女月影の心  
あつた月影もき友は月影

4 早苗  
豊洲川にあり早苗の秋  
らぬ早苗の縁涼き

10 吟鶴  
ふたたび懐く乙女月影の心  
三つかられた友影の影

9 乙女夢  
懐く乙女夢の心  
乙女夢の心

念七首  
懐く乙女夢の心

3 月前露  
晴る夜ハ折男の面ハ福造  
露友床をてし月影

2 月前風  
いづれ月影ハ折男の面ハ福造  
折るに折る月影の心

1 十月夜月  
相坂や月影は折男の面ハ福造  
折るに折る月影の心

十二月十五日  
鎌月十五夜月影

P 冬音和歌十五首  
\* 享保二年一二月、香川宣阿点。  
(端裏) 丁酉臘宣阿点

4 山月  
富士の根に夕暮をよとせむ  
清き月に山風を吹

5 野月  
雲いよもよ香風高煙を  
せり空のゆふに月氣

6 浦月  
月白なる夕夕遠く月影  
清くて舟の浦の月氣

7 花月  
秋すむ月の都に春言比  
重弁の庭乃有明れ秋

8 秋月  
おれ地内花言れ月影  
訓てすかに空かかも秋

9 山家月  
世り通し雲陰に長夜を  
いとり太ふ不月氣

10 月前庭  
月ハ竹曲なり暗て影下  
影しえし月末の松山

11 月古忠  
さうてさうに秋の夜言  
清てや月の影も秋

12 月古鏡  
佛も言らさるに  
月の鏡に昔は人は

13 月古鏡  
神上りやま月影  
さうてはれおふ中と秋

14 月前庭  
さうしも心いよた人  
すむてさう水の月氣

15 月前神社  
訓て神の水の水乃清く  
さうみとては秋の月氣

力三十一  
信女  
直野

Q 冬音和歌二十一首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

(端裏) (破レ) 宣阿点

1 新梅 梅白らん  
 2 昔のあはれ水菜の  
 3 水つ春月  
 川原の  
 立花はかすたやゆい  
 梨小みり即春はあはれ

4 梨花 柳夕れそよめり  
 5 燕 元かえり翅もく  
 6 梅子 佇良すもゆく年葉萌  
 7 雪代 雪あふ雨の心  
 8 初花 今日春の待もせり  
 9 水口まつら小田八  
 10 花は成り人れ在中

9 夕歌 人同したるれ時  
 10 更夜 待つ方よ志深  
 11 郡歌更夜 暮るる守りて  
 12 化ありぬる平曾  
 13 初与三のれ山

19 20 21 22 23 24

18 17 16 15 14

牡丹 三つんまり  
 不気及ん人へあふれは  
 むも白しむもくまふか

水鏡  
 月あつてはすもも 又お天の  
 絶は天霧乃何そく洗

標  
 夕されはそふた高し  
 みろれて涼し 標 伝 記

五月五日

川つと花ゆし海乃也草  
 刈青野れ情 けりし  
 先もあや夫の海も袖たし  
 病てあ月乃玉とけり

高麗草刈りて有も清草と  
 三つみかろふかほし

21 20

引よ文系を代り書根  
 たたし引て馬屋音  
 列音

寄竹流  
 色河より子鳥の影緑  
 赤い地こ丸て影や

合意す  
 何なるも  
 子鳥の影

宣旨

R 冬音和歌十二首

\* 年次未詳、香川宣阿点。  
 (端裏) ナシ

蘇十二首

都早春

1 三條くうむり  
 初こせ想の曾乃ゆり  
 中し侍衆

2 嘆也やそるを掛る白雲  
 玉侍をこくし

3 赤いをそふのむらけ  
 初乃成と先はは

4 取込にそく早苗乃  
 初乃入也く田面は

園地早苗

5 何とを思ふもあふ雨もどしどし  
 三層とていとあつた雲を  
 深山泉 深山泉

6 山ゆきしもよたりもむやうに  
 秋やいづの木の葉は 秋やいづの木の葉は

7 心とくはふせう秋そる  
 花のいそぎ 花のいそぎ  
 閑屋秋夕 一二行

8 次秋のゆふの風より秋夕  
 閑屋秋夕 一二行

9 雨にそすあつたも音は  
 鳥の鳴き 鳥の鳴き

10 晴雨如時  
 神の月も秋もついでに  
 見よと夜定は晴里 見よと夜定は晴里

11 うふにらぬ青のすめた寒の  
 日下れて文の雲人 燈火  
 山家冬雨

12 霜雪に人月のゆまに位ととも  
 世に遠さうか山下 世に遠さうか山下



1 僧の志はつとて つとて  
 音よりあはれ あはれ  
 湖上霞 湖上霞

2 春風よ空を吹く 春風よ空を吹く  
 梅葉袖 梅葉袖

3 手折はる光の 手折はる光の  
 梅 梅

S 冬音和歌十首  
 \* 年次未詳、香川宣阿点。  
 (端裏) ナシ

8  
 他<sup>た</sup>の<sup>た</sup>は<sup>は</sup>思<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

7  
 又<sup>また</sup>つ<sup>つ</sup>や<sup>や</sup>終<sup>は</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>久<sup>く</sup>く<sup>く</sup>現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>を<sup>を</sup>  
 あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>しよ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

6  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

5  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

4  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

9  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

10  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

3  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

2  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

1  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

詠十首和歌  
 初春  
 夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>

丁 冬音和歌十首  
 \* 年次未詳、香川宣阿点  
 (端裏) ナシ

4 萩はなて枝ははなす春柳の  
いとせけはふしの朝露 研一

5 花をよらふ名をききてはゆきと  
恨むふまふまふなり 研一

6 物思ふ我同なり霞むも  
とふ袖も有る月影 研一

7 見花 研一  
あつたに限りもあつたは川  
又てもみくくはほも色香 研一

8 花 研一  
あつたに限りもあつたは川  
あつたに限りもあつたは川 研一

9 春恋 二つをききとてはなはなしてはなす  
かたしや  
高き春恋 研一  
はなはなす 研一

10 春恋 研一  
高き春恋 研一  
はなはなす 研一

1 州たえても花うはなはな天川  
花はまる月の年入道候 研一

2 世みつる名も八月の廿九日  
侍ゆるふの教はる 研一

八月廿九日 研一  
おまき 研一

U 冬音和歌二首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

(端裏) ナシ



V 冬音・仙庵和歌十三首

\* 年次未詳、香川宣阿点。

(端裏) 前欠(破レ) ゆえ不明

1 丹波のゆきも氷のさへも  
 月影のまじりたる路の  
 夕

2 降雪のまじりたる路の  
 月影のまじりたる路の  
 夕

3 月影のまじりたる路の  
 夕

4 丹波のゆきも氷のさへも  
 のこりたる路のまじりたる路の  
 夕

5 丹波のゆきも氷のさへも  
 小世りもまじりたる路のまじりたる路の  
 法門初秋八月  
 夕

6 丹波のゆきも氷のさへも  
 天雨丹波華雪殊々  
 夕

7 丹波のゆきも氷のさへも  
 深着於五級如華雪殊々  
 夕

8 丹波のゆきも氷のさへも  
 譬喻品  
 初三車誘引諸尊慈後推奉  
 夕

9 丹波のゆきも氷のさへも  
 信解品  
 無量珍宝不求自得  
 夕

10 丹波のゆきも氷のさへも  
 藥草奇品  
 一地所生一地所因  
 夕

11 丹波のゆきも氷のさへも  
 檢証品  
 名摩羅跋梅檀香佛  
 夕

12 丹波のゆきも氷のさへも  
 化驗品  
 小是因縁又法法母陀  
 夕

13  
 五首弟子品  
 以平價宝珠整其衣裏  
 又しころしに申く玉儀法  
 念珠十二首  
 何れも冬朝の清文  
 六つ目札の考文  
 宣阿

W 冬音和歌十首  
 \*享保二年七月、香川景新点。  
 (端書) 香川景新点別巻和歌集  
 詠十首和歌  
 冬音音上  
 初春夜  
 1 長閑に空をまらるるあまのり  
 長立初くかま心の端  
 師の菜  
 2 也たまき手に挿き吹鳴今日  
 考方一菊の節祖のあか  
 冬音梅  
 3 白しきつと昔はまの年  
 あれぬふ初る春のそ風

水邊軒  
 4 丹麿風のみるそ池水に  
 いらはあそふ青柳の影  
 五原店  
 5 さらぬ若狭まらるる金  
 雲の金にみけいそく  
 6 晴きやまのまほの  
 神のあけよと神と詠り  
 望詩一  
 7 俗地金にみけいそく  
 言そと契る人ろそ雲に

逢坂贈一

8  
今更の心くるも逢坂にて乃  
其情乃淡面新くあり

逢坂贈一

9  
いふかと傳て立まふに逢坂  
はむ逢く神のありは

恨身一

10  
はまきまをいふに逢坂  
神玉の縮みありは

逢坂贈一  
逢坂贈一

〈翻印編〉

F 冬音和歌三十首

〔端書〕梅月堂宣阿加筆正徳四年〔奥ニアリ〕

〔内題〕詠三十首和歌／平井冬音上

時鳥

8 よひ／＼に覺束なさのひとこゑは誰待つけし山ほとゝぎす

○きくもなを覺束なさのひとこゑは誰まくらとふ山ほとゝぎす

〔珍重〕

五月雨

9 ○みな（マ）の川幾瀬の波も五月雨のひかずにふかき淵と成行

〔宜候〕

沢螢

10 さ（マ）は水に移る光を我ぞともしらでほたるやこがれ来るらん

○さ（マ）は水に移るををのが光ともしらでほたるやしたひ行らん

〔面白候〕

七夕

11 思のみつもり／＼て天の川こよひあふ瀬や淵となるらん

女郎花

12 ○分（マ）て猶いろめく野への女郎花おなじ花のゝちくさながらも

〔珍重〕

岡鹿

13 ○人目をやし（マ）のぶの岡の秋風に暮て妻どふさをしかの声

〔宜候〕

尋虫声

14 ○から衣すそのゝ露にぬれ／＼て人待むしの音をぞ尋ぬる

待月

15 山の端の雲をいとひて宵／＼にまちいでん月の影ぞ久しき

F 冬音和歌三十首

〔端書〕梅月堂宣阿加筆正徳四年〔奥ニアリ〕

〔内題〕詠三十首和歌／平井冬音上

霞中滝

1 ○打むかふ山は霞のたちこめてなのみおとはの滝のしら波

梅薫枕

2 さしてぬる閨の板間も吹分てまくらにかほる梅の下風

○さしこもる閨の板間をもとめてやまくらにかほる梅の下風

〔宜候〕

春月

3 ○涙にはなをこそくもれ春の夜のかすみの袖をいづる月影

〔珍重〕

独見花

4 めかれせぬ花の色香のやさしさに馴てやひとり春の山もり

嶺花

5 ○咲初しはなの光にうつろひていとゞ八重たつ峯のしら雲

〔宜候〕

落花

6 ○あかず見し梢の色もいたづらにちりて砌の花の白雪

野雲雀

7 ○長閑成あしたの原の朝霞たなびく空にひばり鳴なり

- 16 湖上月  
○鳩の海やなみち遙にすむ月の氷をわたる秋のふな人  
〈別而珍重〉  
擣衣
- 17 おもひのみ誰に契てからごろもひとり伏屋の月にうつらん  
時雨
- 18 降ふらぬ外山の雲のいくめぐり時雨に替るそらぞ隙なき  
○降ふらず外山の雲のいくめぐり時雨に替るそらぞ隙なき  
〈別而宜候〉  
暁千鳥
- 19 ○ね覚して聞ば哀もありあけの月のこほりに千鳥なくなり  
炭竈  
行末は雪気の雲に立消て煙さびしきまきのすみがま  
○行末は雪気の雲に立消て煙さびしきみねのすみがま  
〈宜候〉  
忍恋
- 20 うらみつるなみだも共にせき留て人目しのぶの袖のしらなみ  
〈「涙」の縁は無候〉  
不逢一
- 21 逢まも波の磯辺のかたし貝ひとり物おもふ身をいかにせん  
○逢まも波の磯辺のかたし貝わかれて物おもふ身をいかにせん  
〈珍重〉  
隔一
- 22 23 こがれ行便もなみのあまおぶ<sup>(マ)</sup>ふかきおもひはうきしづむとも  
〈題に不叶候〉  
初逢一
- 23 あひ初て今さら替るおもひかなつれなく見へし人のこゝろも  
別一
- 24 ○限あればあかぬ名残も鳴鳥の音にのみかこつきぬくの空  
恨一
- 25 ○水茎の岡のくづばしふく風にいとゞうらみの数ぞそひ行  
絶一
- 26 あかざりし契もいつか絶はてゝ今は夢さへ頼すくなき  
古寺鐘
- 27 西へとぞこゝろもいそげ紫の雲のはやしの入相のかね  
旅行
- 28 ○帰見るみやこのそらも白雲を分てぞこゆるあしがらの山  
〈宜候〉  
神祇
- 29 ○榊葉に置そふ露の光まで誠日吉の影ぞくもらぬ  
〔奥書〕ナシ
- 30 冬音和歌百首  
〔端裏〕梅月堂加筆正徳四年

〔内題〕詠百首和歌／冬音上

〔宜候〕

立春

春曙

待むかふ岩戸の関の朝日影出て神代の春をしるかな

和哥の浦や汀の波も立かへりと（マ）をき詠の春のあけぼの

○霞たつ岩戸の関の朝日影出て神代の春や見すらん

故郷のこゝろはしらず春の雁花をみ捨て何いそぐらん

〔宜候〕

春雨

朝霞

かきくもる空とも見えず降初て霞をつとふ軒の春雨

朝な〜目馴し山の山もせに日影隔てたつ霞哉

○かきくもる空とも見えず降初て霞をつたふ軒の春雨

谷鶯

岸柳

長閑成春しり初て谷陰の雪にたどらぬうぐひすの声

浅みどり岸根の水に影とめて春の色そふ青柳のいと

○長閑しな春しり初て谷陰の雪にたどらぬうぐひすの声

○浅みどり岸根の水に影見えて春の色そふ青柳のいと

残雪

待花

萌出るみどりの草のあらそひてまだらに残る野への白雪

何にかもたぐへて見ばやあくがれて花待春のこゝろづくしを

若菜

〔一、二句、てには不合候〕

○とけ初る沢の水のひま毎に二葉のわかかなかぞへてぞつむ

初花

里梅

珍しと見れば心にこもり江の初瀬のさくらそれと計も

誰里の梅ともわかず天つ風さそふ袂ぞ香に匂ひぬる

〔一首、きれず候〕

○誰里の梅ともわかず春風のさそふ袂ぞ香に匂ひぬる

見花

檐梅

○世のつらさ逃住身は咲花をこゝろのまゝにみよしの、奥

○香ばかりは人にもつけよ朝な夕な目かれぬ軒の梅の下風

〔珍重〜〕

春月

花盛

夜しほくむ道やたどらん立籠て月は霞のうらのあま

咲てちる習とすればあやにくのこゝろをそふる花ざかり哉

○もしほくむ道やたどらん立籠て月は霞のうらのあま

落花

17 風誘ふ春の色香も水無野川見るにあだ成花のしらあは<sup>(ママ)</sup>

款冬

18 春風に匂へる色も玉川のたまとこぼるゝ山吹の露

○春風に匂へる色も玉川やたまとこぼるゝ山吹の露

池藤

19 ○咲かゝる汀の松に行はるをうらむらさきの池の藤なみ

〔む〕ハ裏打後ノ後書〕

暮春

20 うきをのみわすれてむかふ花鳥の色音もついに暮<sup>(ママ)</sup>て行春

○うきをのみわすれてむかふ花鳥の色音もいまは春の別路

〈別而宜候〉

〔端裏〕冬音

更衣

21 香ばかりは心に残れぬぎかへてわすれがたみの花ごろも哉

○香ばかりは心に残れぬぎかへてわすれがたみの花のころもに

卯花

22 月とのみ詠る程もうの花のかけ明やすきみじか夜の空

待子規

23 あくがるゝ習なれどもほとゝぎす待にねぬ夜の数ぞ重ぬる

○あくがるゝ心をするやほとゝぎす待にねぬ夜の数ぞ重ぬる

聞郭公

24 聞ばまた猶こそしたへ一声に雲の外成山ほとゝぎす

○聞初て猶こそしたへ一声も雲の外成山ほとゝぎす

〈宜候〉

杜鵑稀

25 ○たえずのみ聞も習はでみな月の空に稀なるほとゝぎす哉

故郷橘

26 忍べとや絶ても年をふる郷のむかしにかよふ庭の立花

○忍ぶそよいく年月かふる郷のむかしにかよふ庭の立花

早苗

27 雨露の恵もしるく室の苗取や手にく暮いそぐらん

五月雨

28 ぬれてほす隙も波間のおま衣たみのゝ嶋の五月雨の空

○ぬれてほす隙もや波のおま衣たみのゝ嶋の五月雨の空

鶺鴒川

29 篝火もきえては迷ふうき業とおもふにあかぬうぶね成らん

〔迷〕ハ裏打後ノ後書〕

叢螢

30 雨晴て夏なき庭の草むらや風にほたるの露ぞみだるゝ

○雨晴て夏なき庭の草むらやほたるの露も風にみだるゝ

夏草

31 しげりあふ野守の袖もぬれくゝて露にやつるゝ夏草の陰

○しげりあふ野守の袖もぬれくゝていとゞやつるゝ夏草の露

〈宜候〉

夏月

32 待いつる外山の雨の一通り晴て涼しき夏の夜の月

○ふるとみし外山の雨のほどもなく晴て涼しき夏の夜の月

〈別而宜候〉

夕立

見るうちにはや消くゝて村雲の山のよそなるゆふだちの空

○見るうちにはやふり過て村雲は山のよそなるゆふだちの空

杜蟬

夏しらぬ常盤の森の夕風に馴て涼しき蟬の声くゝ

〔夕〕ハ裏打後ノ後書

○夏しらぬ常盤の森の夕風に涼しくひゞく蟬の声くゝ

夏萩

夕風に秋や通へるみそぎ川夏の日影もなみのしらゆふ

早秋

吹からに目に見えぬ物の哀さをかねておぼゆる秋の初風

七夕

○天川年の渡りのわりなさにこゝろをちよと星合の空

萩風

さらでだに秋のね覚の淋しきをとふにつらさの萩の上風

〔萩〕ハ裏打後ノ後書

○さらでだに秋のね覚の淋しきをとふはかなしき萩の上風

萩露

こぼれても同じ錦と宮城野や露分袖の萩が花すり

女郎花

袖ぬるゝ露やしるべと名にめでゝこゝろをのべのおみなへし哉

夕虫

41 けふのみの夕ならぬをきりくゝす何浅茅生の露になくらん

○きりくゝす此宿のみの夕とや音にたてゝなく浅茅生の陰

〈珍重くゝ〉

夜鹿

○菅の根の長き夜すがら鳴鹿はいかに難面きつまやこふらん

〈別而宜候〉

初雁

42 43 はるか成山のいくへの雲わけて見えみ見えすみはつ雁の声

○はるか成山のいくへの雲わけてみやこに来つるはつ雁の声

秋夕

かねて知る哀はかすか見聞にもけふたゞならぬ秋の夕暮

〈二句、いかゞ〉

山月

44 45 待出る心のまゝにうき雲も晴てあらしの山の端の月

野月

46 咲まじる花のゝ露も色に出て詠はるけき秋の夜の月

○咲まじる花のゝ露も色に出てうつるぞあかぬ秋の夜の月

河月

47 ○わかかへり岩打波の玉しまや川風きよくいづる月影

江月

48 朽残る橋は名計ながら江やむかしを月の夜かけて見ん

浦月



- 49 詠れば波路遙に霧晴て月も長井の浦風ぞ吹  
 「詠」ハ裏打後ノ後書  
 ○詠れば波路遙に霧晴て月住の江の浦風ぞ吹  
 〈よし〉  
 籬菊
- 50 うつし植し春より秋の日数へてまがきの霜に匂ふしら菊  
 ○うつし植し春は昨日のほどもなくまがきの霜に匂ふしら菊  
 〈宜候〉  
 擣衣
- 51 ○賤の女のおもひを副て唐衣打明す夜や露にしほれん  
 暁霧
- 52 あふ坂や関の戸かけて鳴鳥にね覚あやしき八重の秋霧  
 岡紅葉
- 53 ○旅人の袖も千入に夕日影さすや往来の岡の紅葉ば  
 庭紅葉
- 54 秋もはや紅ふかくちり初てあらしによどむ庭のみみぢば  
 九月尽
- 55 馴てこし哀おもへば長月やけふを限りの秋の夕暮  
 ○馴来つる名残おもへば長月もけふを限りの秋の夕暮  
 〈宜候〉  
 初冬
- 56 ○うき秋の音吹かへて今朝よりぞ冬になるを沖の松風  
 時雨
- 57 ぬれてほす袖の日影も雲風にいくたび分ず時雨降空  
 ○ぬれてほす袖の日影もはれくもりいくたび風に時雨来ぬらん  
 〈宜候〉  
 落葉
- 58 秋過て露も時雨ももる山はぬれてやいたく木の葉散らん  
 朝霜
- 59 ○夜嵐の音を残して笹の葉に置そふ今朝の霜ぞ寒けき  
 寒草
- 60 ○夕暮をうき身にしめし秋もへて霜葉にかはる庭の荻原  
 千鳥
- 61 玉川や真砂の月の影更て妻なし千鳥声うらむらん  
 水鳥
- 62 池水の深き思を小夜枕ならべて鴛のつがひはなれぬ  
 ○池水の深き思に小夜枕ならべて鴛やつがひはなれぬ  
 〈宜候〉  
 水初結
- 63 ○音絶る竹のかけひのたまり水よの間を寒み水初けん  
 冬月
- 64 板間もる光はよしや小夜ごろもかさねても猶冬の月影  
 鷹狩
- 65 ○狩くらし鳥の落草分侘ぬ交の、御野、月に成まで  
 野霰
- 66 草の葉の霜やはらふ玉霰ふる野、原の音のさやけさ

浅雪

吹誘ふ嵐は松に音さえてまだ浅はかの庭の初雪

○吹誘ふ嵐は松に音さえてまだ深からぬ庭の初雪

積雪

〔積〕ハ裏打後ノ後書

○下折の竹のよの間に降籠て山とし積る雪のあけぼの

閑中雪

淋しさの夕をしめて降雪にとひこん人と松の下庵

○淋しさの夕をこめて降雪にとひこん人や松の下庵

歳暮

春はうき秋はつらきと別しもくらべまおしき年の暮哉

寄月恋

今は身の心づくしよ待かひもほのめく空の三日月の影

一雲一

おもひやる心のすへもかきくもり雨とや降ん八重の浮雲

一露一

消果ん晧かけてよひくゝに契るやあだの露の玉の緒

一雨一

物おもふ夕の空のむら雨は袂からこそ降初にけれ

○物おもふ夕の空のむら雨は袂よりこそ降初にけれ

一風一

そよかゝる垣尾のまくず恨んとおもふにまだき秋風ぞ吹

一山一

こひくゝて今や心の筑波山このもかのもにあらぬ思を

一関一

あふさかや関の戸ざしも夜かけておもふが中は人目守らん

一海一

和田の原立あだ波のよるさへもおもひみだるゝ八重のしほ風

○和田の原立あだ波のよるは猶おもひみだるゝ八重のしほ風

一原一

忍ねの朝の袖もいとはずよ露を別の小野ゝ篠原

一橋一

神かけて契りしかひも中空にいつかあだ成久米の岩橋

○神かけて契りしかひも中空に積てはかなき久米の岩橋

〈珍重〉

一木一

ぬれつゝも便渚の身をつくしいつの月日に恋渡るらん

一草一

生茂る色も匂もいたづらに身をふる里の軒の下草

〔たつ〕ハ裏打後ノ後書

一鳥一

おもひねも心計よ山鳥のおろの初尾の月日算へて

○おもひねに鳴ぬまぞなき山鳥のおろの初尾の月日算へて

一虫一

頼めおく夕はかねて一筋におもひ乱れぬさゝがにの糸

○頼めおく夕はかねて一筋におもひ乱るゝさゝがにの糸

- 85 はかなさは独臥猪の床とはにあらぬおもひのよをなげく哉  
 一 獣一  
 一 玉一
- 86 絶てのみ今幻の夢なれやかざしの玉にかけし契も  
 一 鏡一
- 87 ○契きな真清の鏡影とめてむかふこゝろの底井なき迄  
 一 枕一
- 88 見し夢の面影計立副て人はこすげのまくらなりけり  
 ○見し夢の面影計立副て人はこすげのまくらさびしき  
 一 衣一
- 89 世にもれん涙やいとふ小夜衣かさねても猶袖のせばさに  
 ○世にもれん涙ぞいとふ小夜衣かさねても猶せばき袂は  
 〈宜候〉  
 一 糸一
- 90 乱ては末のあふせもかた糸のかけてくるしき賤のおだまき  
 浦松
- 91 もしほやく煙を籠て夕なぎや波に一むら三保の浦松  
 ○もしほやく煙を籠て夕なぎの波に一むら三保の浦松  
 〈か様の「や」の字、よろしからず候〉  
 窓竹
- 92 ○学ばやうきふし茂き世の中に馴てすぐ成窓の呉竹  
 〈珍重〉  
 山家風
- 93 いとひにし世のうきよりぞ聞佐ぬ馴てまくらの山おろしの風  
 〈てには、不合候〉  
 田家
- 94 とふ人も絶てあらしの風をいたみ山田のかり庵月や守らん  
 〈結句のはね、いかゞ〉  
 故郷
- 95 遠き世に立も帰らでさゝなみやいく春秋を志賀のふる里  
 〔「帰」ハ裏打後ノ後書〕  
 〔四、五のうつり、いかゞ〕  
 海路
- 96 沖つ船漕行末もしら波にうきねの夢やせて頼ん  
 〈此「せて」、俗意の様候。俗間に用「せて」は、心不  
 合候〉  
 羈旅
- 97 ○こし方を忍べば遠き明暮に夢もあらしの小夜の中山  
 述懐
- 98 世をうしとおもふ計にながらへて老はね覚のなみだ悲しも  
 神祇
- 99 ○天が下ひろき恵の跡とめて幾代になりぬ賀茂のみづがき  
 〔「と」ハ裏打後ノ後書〕  
 祝言
- 100 梓弓やまと嶋ねもうごきなきめぐみの数にいかでもれなん  
 ○梓弓やまと嶋ねのうごきなきめぐみの数にいかでもるべき

〔奥書〕 ナシ

H 冬音和歌十六首

〔端裏〕 梅月堂加筆正徳五年未

〔内題〕 詠十首和調／平井冬音上

早秋曉露

1 秋来ればはやぬれ初てね覚する袖やは露の宿りなるらん

〔「ね覚する」ハ裏打後ノ後書〕

○秋来ればはやぬれ初てね覚する袂や露の宿りなるらん

野外夕虫

2 夕されば小の、篠原しのふにもあまりてむしの音にや立らん

〔古哥の詞、出過候〕

嶺上月明

3 光そふ空のみどりと見しもはやさしのぼる峯の月ぞ曲なき

月前雁来

4 ○月は猶ちさとも晴て遙成いなばの雲に雁は来にけり

海辺擣衣

5 ○須磨のあまや暇もなみの音副てあかつき深く打衣かな

〔珍重〕

依忍増恋

6 もらさじと思ふに付て泪川いやまさり行袖の白浪

○もらさじと思ふに付て泪川袖行水ぞいやまさりぬる

〔別而宜候〕

契不逢一

7 ○此まゝにおもひや果ん契り置て逢見ぬ中の心づくしを

後朝怨一

8 今朝は猶恨もそふや思ひつゝ又ねの床のあらぬ夢路に

○今朝は猶恨もぞそふ思ひつゝ又ねの床のあらぬ夢路に

旅宿寢覚

9 草枕（マ）をなじうき身のうきめだに幾夜ね覚に替りもぞする

社頭松久

10 ○君が代に吹つたへつゝ神路山めぐむ百枝の松の下風

外に／冬日三首題／冬音上

寒草

11 いつのまにうつろひ初つ野べは皆秋見し花も霜の下草

○いつのまにうつろひはてゝ野べは皆秋見し花も霜の下草

聞佐し哀は夢か風ならでさらに淋しき霜の荻原

氷

13 ○さゆる夜は猶水鳥のとことにはに馴てくるしき池のうすらひ

三嶋江や折臥蘆の上氷むすぶも深き水のこゝろを

雪

15 かきくもる空を霞とみよしのやさながら雪も花の白妙

16 ○かきくもる空を霞とみよしのやさながら雪も花の面影  
 〈宜候〉  
 村雲はかゝれど積る雪に今近まさりぬる遠の山の端

〔奥書〕 合点十首／何も面白珍重く／宣阿（花押）

1 副雄等和歌三十首

〔端裏〕 宣阿加筆正徳五末年

〔内題〕 詠三十首和歌／冬音上／仙庵上

暁霞

副

横雲の立とも見えず打むかふ山の端いと霞増れる

○横雲の立とも見えず打むかふ山の端かけて霞む明ぼの

〈宜候〉

常

山の端もほの見ゆるより明初て麓の里に立霞かな

海帰雁

冬

仮初の宿りも波のちへもへ海原遠く帰る雁がね

常

見送れば果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る雁がね

○見送れば果しもあらぬ海原の雲の浪路を帰る雁がね

〈珍重〉

苔上落花

副

5 白妙に散埋みぬる花を今朝雪とみどりの苔の通路

仙

6 ○風誘ふ梢の花のしらゆきにこけのみどりの色も移らふ

樹陰卯花

仙

7 夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる宿のうの花

○夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる庭のうの花

〈珍重〉

冬

8 消残る雪と見えしも木隠に猶日数へて咲るうの花

雨後蟬

仙

9 ○村雨の晴行あとは雲もなき空までひびく蟬の諸声

〈宜候〉

冬

10 夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき衣手の森

○夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき森の下陰

〈珍重〉

閑庭露

常

11 夫かとも問れぬ庭は秋草に心のまゝの露のゆふ暮

〈「露の夕暮」、制の詞にて、よまぬ事に候。制の詞の内、

「雪の夕暮」「雨の夕暮」「露の夕暮」、よみ不申よし〉

副

12 あだなりと見し世の露も今更にこゝろをみかく浅茅生の宿

- あだなりと見し世の露も今更にこゝろくだくる浅茅生の宿  
 水郷月 仙
- 13 澄月の影を移して水瀬川波の底にも秋のいろ哉  
 〈結句、いかゞ〉  
 副
- 14 ○眺やる水上遠くてる月のひかりに下す宇治の柴ふね  
 〈風景宜候〉  
 仙
- 15 行路紅葉  
 ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出けり  
 ○ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出ぬる  
 常
- 16 玉鉾の道行人の袖笠も共にしぐれの染る丹葉々  
 〔笠〕の字出候、詮なく候  
 落葉 副
- 17 ○吹誘ふ音を聞にも冬の夜のあらし淋しく木葉降なり  
 〈宜候〉  
 仙
- 18 今朝見れば積る落葉に浅茅生のめ馴し庭も面替りして  
 寒蘆 副
- 19 いつとなく枯て砌の池寒み蘆の臥葉ぞ水閉ぬる  
 冬
- 20 ○水鳥の床もあらはに三嶋江や霜枯寒き蘆の村立  
 〈宜候〉
- 21 いかなれば軒端に並ぶしのぶ草余所めに袖の涙せくらん  
 近恋 常
- 22 ○いひかはす蘆の中垣へだてゝも思ひは同じ軒の下草  
 馴恋 冬
- 23 ○おもひせく泪の雨の折くになれていろそふ山姫の袖  
 仙
- 24 しのびあひし昔も同じ思ひには馴し印と何をかはせん  
 寄灯恋 仙
- 25 ○窓しらく明行闔にともし火のきゆる斗の思ひをぞする  
 常
- 26 待詫てひとりぬる夜の灯はもへておもひのくらき物かは  
 故郷 常
- 27 ○何国ぞとさして分べき方もなしむぐらに閉る古里の庭  
 〈宜候〉  
 冬
- 28 斧の柄の朽もしらず住荒て里はむかしの面影ぞなき  
 榊 副
- 29 神垣や隔はあらし榊葉の香を一筋に留てさゝまし  
 冬
- 30 ○千早振神代のまゝに榊葉も栄ひさしき天の香久山  
 〈宜候〉

〔奥書〕 点十六首／此一巻近来之内／別而御秀逸／珍重く／宣  
阿〔花押〕

J 副雄等和歌三十首

〔端裏〕 梅月堂加筆正徳六申春

〔内題〕 詠三十首和調／山本副雄上／長沼仙庵上／平井冬音上

早春霞

1 ○きのふけふ春になるとの浦遠き波路長閑にたつ霞かな

2 雪ながら今朝は霞の衣きて春めつらしき山姫の袖

3 ○昨日今日波の花よりたつ春に海原とをく霞たな引

〈宜候〉

静見花

4 ○咲花の光のどけき春の日はよそに心の散方ぞなき

〈宜候〉

5 いとゞ猶長閑にむかふ我宿のはなにあらしの音もなき日は

6 ○むかひみる心長閑けし我宿のはなにあらしの音たゆる日は

長閑成日影なればやあやにくの心を花にそめて詠ん

野郭公

7 ○一声にふりさけ見ればほとゝぎす影もなつ野々末の白雲

〈珍重〉

8 夏草の茂れる野辺に郭公（マユ）をのが五月と千百帰啼

9 ○子規のもりの鏡すむ月の影やしたひて落帰りなく

深夜蛍

10 夏草の露も置そふ夜を深みもゆる蛍の影ぞさびしき

○夏草に置そふ露も深き夜にもゆる蛍の影ぞすゞしき

〈珍重〉

11 音に立ぬおもひはいとゞ深き夜にすだくほたるぞもゆるかひなき

12 ○更る夜は猶も蛍のおもひ川下流水に影ぞ乱るゝ

〈宜候〉

海辺月

13 螢の住蘆屋の軒は満汐とともに影さす秋の夜の月

14 ○詠やる雲より波の果ぞなき海原てらす月の光に

15 ねられじな螢の磯屋の苦びさし影さす月に身をしかこてば

山紅葉

16 日数ふる秋の時雨に（マユ）をく山も端山も今は紅葉してけり

○まなくふる秋の時雨に（マユ）をく山も端山も今は紅葉してけり

〈宜候〉

17 夜のみ降時雨や染しきのふより今朝は色濃き峯の栂葉

18 ○よるのまの時雨や染しきのふより今朝は色濃き峯の柀葉  
〈宜候〉  
山はみないろもちしほに夕附日さしまどはせる柀葉の影

朝寒蘆

19 いづる日の光も寒き難波江の蘆の霜葉に浦風ぞふく

○いづる日の光も寒き難波江の蘆の枯葉に浦風ぞふく

20 ○出る日にむかふも淋し難波瀉霜枯さむき蘆の群立

池の面は日影もさすか冬枯て朝霜まよふ波の群蘆

関路雪

22 足柄の関の戸ざしと雪は降ど道し有世は往来絶せぬ

○足柄の関の戸ざしと雪は降ど道し有世は往来絶せず

積れども道有御代の関の戸や雪にたどらぬ相坂の山

降雪に埋れはてゝいづくにか不破の関屋の跡し尋ん

○降雪に埋れはてゝいづくにか不破の関屋の跡を尋ん

忍待恋

25 待に來ぬ人もしるらめ諸共にしのぶに付て夜の更るとは

○待に來ぬ人もしるらし諸共にしのぶに付て夜の更るとは

〈珍重〉

27 ○色に出ぬ軒のしのぶの露の袖ぬれて幾夜か待習ひけん

さらでだに待は物うき終夜人目のしのぶの涙かこたん

稀逢恋

28 ○打とけて又いつかはと結ばましあふよまれなる中の下紐

〈珍重〉

29 誓ひぬる神もしらじな希にのみ枕の塵をはらふ契は

○思ひいづる恨も解て七夕の契にたぐふ夜半の下紐

〈宜候〉

30 〔奥書〕合点十九首／何も面白珍重く／宣阿（花押）

K 仙庵等和歌十六首

〔端裏〕宣阿加筆享保元丙申

〔内題〕詠十六首和調／長沼仙庵上／平井冬音上

兼題 鶯為友

1 余所に又友は求し永き日を慰めてなく鶯の声

○余所に又友は求し永き日を慰めてきく鶯の声

〈宜候〉

2 聞初て今更春の友なれや軒端に通ふ鶯の声

○吳竹の千代をしらべし初音よりなれて友なる宿の鶯

○吳竹の千代をつげこし初音よりなれて友なる宿の鶯

〈珍重〉

4 梅がゝに馴てぞ来鳴鶯は榮行宿の春の友なれ



当座柳風

5 長閑成風に春しる若緑まだ色見せぬ青柳の枝  
6 春風に猶幾度かむすぼるゝあとよりとくる青柳の糸

○春風に猶幾度かむすぼれとくるもやすき青柳の糸

〈宜候〉

月前梅

7 梅がゝの匂ひもふかき木の問さへ立枝ばかりに霞む月影  
8 見渡せば木の問漏来る月影にふかくもやどる袖の梅がゝ

○ながむれば木の問漏来る月影もやどりてふかき袖の梅がゝ

〈珍重〉

霞中帰雁

9 空近く鳴つゝ帰る雁金もやがて霞を隔てぞきく  
10 年毎に帰り馴すは八重霞む雲路をいかに春のかりがね

○年毎に帰り馴すは霞たつ空にまよはん春のかりがね

〈珍重〉

夜思花

11 帰るさの花の名残にねてもなを面影(おもかげ)さらぬ春の夜の夢  
12 永き日を花に染たる心とて梢に通ふ春の夜の夢

○永き日を花に染たる心とて木陰に通ふ春の夜の夢

〈別而宜候〉

春神祇

13 此まゝに千代も曇らじ春日山春のひかりに向ふ心は

○春をへて千代も曇らじ春日山神のひかりに向ふ心は

〈別而宜候〉

14 天下おほふ日影も春に今さすか三笠の山は長閑し

春祝

15 わたつ海の真砂の数はつくるとも神代の春は限しられず

○わたつ海のその真砂はつく(つ)ずとも神代の春の数はしられじ

16 立帰る春ぞといへば年毎に替らぬ御代の風ぞ長閑き

〔奥書〕合点八首／此卷別而宜敷／珍重／宣阿（花押）

L 冬音和歌十二首

〔端裏〕宣阿加筆享保元丙申夏

〔内題〕詠十二首和調／平井冬音上

嶺樹霞

1 空に先霞み初けり高円の尾上の松も春を深めて

○空に立霞やいくへ高円の尾上の松も春を深めて

〈宜候〉

湖水余寒

2 長閑成ながめもあやしよるくはまたさへ帰る志賀の浦波

○長閑成朝夕ならよるくはまたさへ帰る志賀の浦波

〈珍重〉

窓前梅

3 ○尋来る人の袖には梅がくをなを吹こめよ窓の春風

〈宜候〉

月前帰雁

4 ○霞つゝ心ぼそくも帰らん月に音を鳴春の雁金

〈別而宜候〉

雨中春草

5 けふ幾日晴ずふるやのしのぶ草しのに萌初る春雨の空

山花如錦

6 ○帰るさの袖に折ばや詠来て山路暮せる花の錦を

暮春鶯

7 ○朋とせし春の日数も杉の戸に名残やつけて鶯のなく

〈宜候〉

寄暁恋

8 独ねも馴し別を習ひにて心迷はず暁のそら

〔習ひ〕ハ後書

○独ねも有し別をしたひ出て心迷はず暁のそら

寄朝一

9

黒髪もみだれて猶ぞ忘れねあしたの床に残る涕

〈珍重〉

寄昼一

10 山鳥のよるの思ひか袖にせく我なみださへひるま成らん

寄夕一

11 来ぬ人を待とはなしに物おもふゆふべの空ぞ面影にたつ

寄夜一

12 ○我ならぬつらさとや見ん逢馴て又ひとりぬる夜半の思ひは

〈宜候〉

〔奥書〕合点九首／右何も面白珍重く／宣阿（花押）

M 冬音和歌二十首

〔端裏〕享保元年申ノ七月日梅月堂加筆

〔内題〕詠二十首和調／平井冬音上

雲間郭公

1 ○殊更になごりぞしたふ時鳥雲の絶間をもらす初音は

江中菖蒲

2 ○風かほる水のみどりも深き江になびく菖蒲の影ぞ涼しき

〈よろしく候〉

- 3 門田早苗  
せき入る水の心も外よりぞわきて門田に早苗取也  
暁更照射
- 4 ○寄鹿の目合す程も短夜やともしのかげの余所に明行  
旅舟五月雨
- 5 漕ふねの苦の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空  
○とまりぶねの苦の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空  
寢覚水鶏
- 6 聞馴てぬるが中にも幾度かね覚しらする水鶏成らん  
叢中螢火
- 7 夏草の茂き思ひのむねの火もこがれていとゞよるほたる哉  
毎夜鶺鴒川
- 8 消もせめやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鶺鴒悲しも  
○消もせずやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鶺鴒悲しき  
池上蓮
- 9 よる波も玉かとはかり池水に心をみかく露の蓮葉  
林頭蟬
- 10 ○陰深き岡への松の夕風に梢をわたる蟬の諸声  
寄初草恋
- 11 ○浅からず根ざしにけりな初草のはつかにもゆる下の思ひも  
寄忍草一
- 12 此まゝに朽も果なばふる里の軒にしおの草の名もうし  
○此まゝに朽も果なばふる里の軒にしおの草の名ぞうき
- 13 寄思草一  
○うら枯る尾花がもとの思草おもほえずのみ色にいらん  
寄下草一
- 14 わりなしやうき名は余所に守山の時雨も染ぬ松の下草  
寄忘草一
- 15 つれもなき種や蒔けん住の江の岸根に生ふる恋忘草  
暁遠情
- 16 哀しる唐土人のこゝろまでね覚もよほす袖の泪に  
候  
へ「ね覚」、題にてはよみ候。たゞは、四十歳以上にてよみ候
- 17 夕幽思  
物おもひに猶も立まふうき雲の夕をいとふ行末の空  
雲浮野水
- 18 立ぬるゝすそのゝ水の草がくれ行かふ雲も影をひたして  
旅宿夢
- 19 草枕結びもはてず故郷は夢にも猶や遠ざかるらん  
○草枕結びもはてず故郷は夢にさへ猶遠ざかり行  
候  
〈珍重〉  
寄神祝
- 20 ○治まれる代々の恵は行末もかけてぞおもふ神の白木綿  
候  
〈面白候〉  
〔奥書〕ナシ

N 冬音和歌十首

〔端書〕 享保元申冬梅月堂吟味

〔内題〕 詠十首和歌／平井冬音上

朝雪

待つけし友さへいたふ今朝はまづ跡おしまるゝ雪の詠に

○今朝はまづ跡おしまれてとはるべき友さへいと宿の白雪

〔宜候〕

夕雪

山の端は暮るとも見えず降雪にねぐらやしたふ村鳥の声

○暮るとも見えぬ山への雪の色に鳥はねぐらをしたひてぞなく

〔別而宜候〕

夜雪

ひまもるかぬる夜も深き窓の中にあつめぬ雪の光をぞ見る

○ひまもるかむかふ夜深き窓の中にあつめぬ雪の光をぞ見る

〔珍重〕

山雪

色見えて降程もなし高砂の尾上にかゝる雪の白雲

〔雪の降候時は「白雲」に、亦晴候日の雲は「白くも」〕

野雪

5 ○面影は猶ふりかはる深草や霜より後の野辺の白雪

6 冬籠る下のおもひやいはしろの岡の草根も積るみ雪に

〔万葉の古哥を出され候へども、上句下へかけ合、ふし立の

みかの様に候〕

浦雪

浦雪

7 ○類ひなや波もひとつに白妙の雪を敷つの浦の眺は

〔珍重〕

川雪

8 ○岩間／＼氷れる上に色見えて猶しら雪はふる川の水

松雪

9 ○降まゝに風はよはりて松の葉の色もつれなく積る雪哉

竹雪

10 ○降埋む夜の間の雪の声聞や下折ふかき軒の村竹

〔宜候〕

〔奥書〕 合点八首／何も面白珍重／宣阿（花押）

O 冬音和歌十首

〔端書〕 享保第二丁西夷則梅月翁宣阿点

〔内題〕 詠十首和歌／長沼寿仙庵上／雪竹軒融成冬音上



- 4 富士の根に夕居雲は上なれや待出る月に山風ぞ吹  
野月
- 5 ○類ひなや色さへ香さへ露深き花にうつろふ野への月影  
〈宜候〉  
浦月
- 6 ○蘆田鶴の声さへ遠く引汐につれてふける（つむぎ）の浦の月影  
〈珍重〉  
花洛月
- 7 秋にすむ月の都の名も高き雲井の庭の有明の影  
故郷月
- 8 ○あれ増る飛鳥の里に月ひとり馴てむかしにすみもかはらず  
山家月
- 9 ○世に通ふ心も絶て長き夜をひとり太山にすめる月影  
〈珍重〉  
月前雁
- 10 月は猶曲なく晴て飛雁の影も見え行末の松山  
○月は猶曲なく晴て飛雁の影も見え行秋の半天  
〈「松山」、なくてもよく候〉  
月前虫
- 11 ○さらでだにうき秋の夜を鳴虫もふけてや月の影うらむ覽  
〈宜候〉  
月前鏡
- 12 佛もうきいつはりに曇りけん月の鏡に昔おもへば
- 13 ○袖の上によどれる月を形見ともしらでつれなき中と成覽  
月前恋  
月前述懐
- 14 しらざりしものと心やいかにたえんすむこそやすき水の月影  
月前神祇
- 15 ○馴て猶よるべの水の浅からぬめぐみをてらす秋の夜の月  
〔奥書〕合点十一首／何も面白／珍重く／宣阿（花押）
- Q 冬音和歌二十一首  
〔端裏〕〔上部破レ〕宣阿点  
〔内題〕〔上部破レ〕歌／僊庵上／冬音上／独吟
- 1 思はずもねし夜の床の草枕誰たよりもて梅匂ふらん  
○草枕ねし夜の床に思はずも誰たよりにか梅匂ふらん  
〈宜候〉  
故郷柳
- 2 したへとや昔のあとを水草ゐし板井にうつす青柳のいと  
〈うた、くらく候〉  
水郷春月
- 3 立籠てかすめる空やさだかにも影はみつ野々春の夜の月

- 川浪のかすめる空やさだかにも影はみつ野、春の夜の月  
梨花
- 4 朝夕のそらのひかりも真白なる軒のつまなし花咲に晷  
〈一、二句、可有候〉
- 燕
- 5 ○空に見し翅もやがて山里の古巢に通ふつばくらめ哉  
雉子
- 6 ○狩衣すそ野、草葉萌るより有かしられず雉子鳴らし  
〈別而宜候〉
- 苗代
- 7 恵ある雨の心にふかめつ、水口まつる小田のなはしろ  
○恵ある雨の心をあふぎつ、水口まつる小田のなはしろ  
〈宜候〉
- 初花
- 8 ○今日幾日待とせし間に咲初て花に成行人の世中  
夕款冬
- 9 人問どたそかれ時の空目にもいはぬいろなる山吹の花  
〈上下かけ合ず候〉
- 藤花似雲
- 10 ○はるくくと打出て見れば雲にのみまがへて咲る田子のうら藤  
〈別而宜候〉
- 更衣
- 11 ○惜むそよ花染衣色も香も夏たつけふの袖の名残に
- 都鄙更衣
- 12 みやこよりけふ立かへて花染も化になりぬる木曾の麻衣  
〈下句、可有候〉
- 待郭公
- 13 ○などでかく待に心の奥深く初音しのぶの山ほとゝぎす  
〈珍重く〉
- 牡丹
- 14 あかず見ん人のこゝろに咲初る花も匂ひもはつか草哉  
〈二所にて、きれ候〉
- 水鶏
- 15 ○月ならでさすとも見えぬ天の戸を絶ず水鶏の何たゝく覽  
〈珍重く〉
- 樗
- 16 夕されば雲間の露も吹風にみだれて涼し樗咲影  
○夕されば雲間の露も吹風にみだれて涼し樗咲陰  
〈宜候〉
- 五月五日
- 17 引つゝも枕ゆはましあやめ草刈葺軒のつまともろねに  
〈結句、可有候〉
- 18 ○光そふあやめの露も袖の上に落て五月の玉と乱るゝ  
〈珍重く〉
- 19 ○菖蒲草刈ふく宿も浅茅生のしげみがくれにかほる涼しさ  
〈宜候〉

20 ○けふは又幾千代となく長き根をためしに引て菖蒲葺也

〈別而宜候〉

寄竹祝

21 色深き千尋の竹の若緑幾よをこめて影やそはなん

○色深き千尋の竹の若緑幾よをこめて影しげるらん

〈宜候〉

〔奥書〕合点十五首／何も面白御詠共／御工夫御升進／大二珍重

く／宣阿（花押）

R 冬音和歌十二首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕詠十二首／冬音上

都早春

1 立籠てかすむぞしるき春来ぬと都は野辺の雪のひかりも

○立籠てかすむにしるし春来ぬと都は野辺の雪のひかりも

〈殊宜〉

望山待花

2 ○咲ぬやとこゝろに掛る白雲に花待なれてむかふやまのは

〈殊宜〉

簾外燕

3 ○永き日をこすのひまなく古巢とふ軒のつばめはかげもはなれず

〈よろし〉

岡辺早苗

4 取からにいそぐ早苗のかひやある軒端の岡につゞく田面は

○取くゝにいそぐ早苗のかひやある軒端の岡につゞく田面は

〈尤候〉

雨中螢

5 何ごとを思ひにもゆる雨も夜にしほれていとゞけたぬ螢は

〈四句、可有候〉

深山泉

6 山ふかみむすぶたもともひやくかに秋といはねの水の涼しさ

○山ふかみむすぶたもともひやくかに秋といはねの松の下水

〈珍重〉

始見草花

7 心とくうつろふ色ぞ秋をしる千種にいそぐ萩が初花

〈一、二、猶可有候〉

〔いそぐ〕ハ貼紙後書

関屋秋夕

8 ○吹越るゆふへの風に身を秋のうきやはそふる須磨の関守

〈珍重〉

霧中間鶉

9 ○そこと聞あたりも深く霧籠て色なき野べにうづら鳴なり

〈面白〉

時雨知時



10 ○神無月まなくもいつかしぐれ来てわすれぬ空に晴曇るらん

炬火忘冬

11 ○かきおこす宵のすさみに寒るを（破し）□わすれて更る闇の埋火

〈よろし〉

山家冬雨

12 ○霜雪に人目かるれば住とても世に遠さかる山ぞ淋しき

〔奥書〕愚点十首／何も面白風体好／珍重く／宣阿（花押）

S 冬音和歌十首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕詠十首和歌／冬音上

湖上霞

1 漕船の跡もへだてゝをふの崎音こそ寄れ霞む浦波

○漕船やいづくをさしてをふの崎音も霞みて遠き浦波

〈殊宜〉

雪中鶯

2 ○春寒き空にも馴て淡雪のふるすを余所に来鳴鶯

梅薫袖

3 手折つるきのふのまゝの袖に見よしるべうれしく匂ふ梅がゝ

山家花

4 したひ来る人目もあれど松の戸に花の香誘ふ風はいとはず

○したひ来る人もありやと松の戸の花の香誘ふ風はいとはず

〈よろし〉

里款冬

5 里の名やいはでもそれとみちのくのこがね色にも咲る山吹

○里の名はいはでもしるしみちのくのこがねの色に咲る山吹

〈殊宜〉

寄曉恋

6 身のうへにかけなばうしや難中の曉いそぐ鳥の八声ぞ

○身のうへにかけなばうしや難中の別をいそぐには鳥の声

〈珍重〉

一朝一

7 又いつと契るにかへて起居すはあしたの床をいかではなれむ

一夕一

8 絶てだに思へばさすがこし時の夕に似たる空ぞえならぬ

○絶てだに思へばさすがこし時の夕に似たる空もなつかし

窓雨晴

9 軒はまだしたゝる雨の音ながら夕の窓に晴る日のかげ

○軒はまだしたゝる雨の音ながら夕日のかげぞ窓にかゞやく

〈よろし〉

山寺灯

10 ○消やらで幾世高野の山陰に暁てらす法の灯

〔奥書〕愚点八首／何も珍重く／宣阿（花押）

丁 冬音和歌十首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕詠十首和歌／冬音上

初春

1 ○やゝとくるこほりのひまに吹かけて池のなみよる春の初風

〔風体好、珍重く〕

残雪

2 春もまだ日影至らぬ蘆垣や間ちかき去年の雪の通路

〔日影ノ至ラヌト云ハ、イカゞト。五句も不宣〕

梅風

3 ○難波江に吹風さそふ咲やこの花も時しる春にかほりて

〔よろし〕

柳露

4 ○散と見て猶枝つたふ青柳のいとゞおもげになびく朝露

〔殊宜〕

帰雁

5 ○花をまつころもしらで帰るやと恨むもしたふ春のかりがね

〔珍重〕

春月

6 ○物思ふ我泪より霞むともしらじな袖に宿る月影

〔珍重〕

見花

7 あく世だに限りもなしや花に馴て見てもみまくのほしき色香は

○あくとなき心をしるや桜花見てもみまくのほしき色香は

〔殊宜〕

款冬

8 ○散やらぬ花も絶く川水にながれて井手の岸の山吹

春恋

9 忘れぬ心にもゆる春の草つゝむとすれど雪問求めて

〔二句、ムネノモヘコガル、也。シカルニ、三句ノカケ合、

イカゞ〕

春祝

10 ○鶯も幾春なれて呉竹の万代契る音をやなくらん

〔殊宜〕

〔奥書〕八点／何も別而珍重く／宣阿（花押）

ウ 冬音和歌二首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕ナシ／冬音上

当座／七夕

1 ○とだえても契りはかれず天川夜をまつほしの年の逢瀬は

〈珍重〉

当座／八月十五夜

前夜までなくもりしを、こよひとりわけ晴侍れば

2 ○世にみつる名とて八月の中空に待待たるけふの影のさやけさ

〈殊宜〉

〔奥書〕 皆之／何も珍重く 宣阿

V 冬音・仙庵和歌十三首

〔端裏〕 前欠（破レ） ゆえ不明

〔内題〕 同 右

1 〔前欠（破レ）〕 丹葉にふかき水のしがらみ

〈是は影の事と見え、題のこゝろにそむき候はん〉

月前落葉

仙

2 降音はよしや時雨にまがふとも月に落葉の数ぞかくれぬ

○降音は時雨にまがふ梢より月に落葉の数ぞかくれぬ

〈珍重〉

冬

3 月は猶木のまに晴て更る夜の風ぞみだるゝ庭の紅葉ゝ

○更る夜の月は木のまに晴添てあらしに落る庭の紅葉ゝ

〈珍重〉

篠雪

冬

4 打さやぐ音しも絶てさゝの葉にのこるあしたの霜ぞ寒けき

仙

5 冬枯にのこる色をも隔てじな小笹にむすぶ今朝のあさ霜

○冬枯にのこりし色も隔てぬや小笹にうすき今朝のあさ霜

〈宜候〉

法門和歌八首／冬音上

序品／天雨曼陀華曼珠沙華

6 しらざりし色さへ香さへ時を得て空にめぐみの花ぞ散しく

○珍しな色さへ香さへ時を得て空にめぐみの花ぞ散しく

〈宜候〉

方便品／深着於五欲如犂牛愛尾

7 草の葉（マユ）おく露の身をいかばかり我ものがほにむすびとめ剣

○草の葉におく露の身をいかばかり我ものがほにむすびとめ剣

譬喻品／初以三車誘引諸子然後但与大車

8 偽ものればまことに引かえぬ（マヤ）うれしやうしの車もとめて

○偽ものりのまことに引かえぬうれしやうしの車もとめて

〈宜候〉

信解品／無量珍宝不求自得

9 雲霧もはれてあかしの浦かぜや月の鏡の俤ぞそふ

○雲霧もはれてあかしの浦かぜに月の鏡の影ぞそひゆく

菓草喩品／一地所生一地所潤

10 ○恵みます雨の心に草も木もうるふ末葉の露の白玉

授記品／多摩羅跋梅檀香仏

11 ○うぐひすの羽風もさぞな匂ふらん空にみちくるよもの梅が、

〈宜候〉

化城喩品／以是因縁今説法華経

12 ○うつろひしかげも岩まの薄ごほりとけてまことのさゞ波ぞたつ

五百弟子品／以無価宝珠繫其衣裏

13 ○ゑひ醒て身の怠りをおもふにぞ又もころもにゆらく玉の緒

〔奥書〕合点十二首／何も面白別而将又／六かしき題御秀逸

重く／宣阿（花押）

W 冬音和歌十首

〔端書〕享保二西夷則景新加筆〔奥ニアリ〕

〔内題〕詠十首和歌／平井冬音上

初春霞

1 ○長閑さを空にまづしるあさみどり春立初てかすむ山の端

〈珍重く〉

野若菜

2 ○色見えて手には摘れず昨日今日雪間に萌る野辺の若菜は

古宅梅

3 ○匂ひ来ていとゞ昔をしのぶ草あれぬる軒の梅の下風

〈よろしく候〉

水辺柳

4 打靡く風のみだれも池水にいろをあらそふ青柳の影

遠帰雁

5 とゞまらぬ名残だに有雁金の霞の余所に何いそぐ覧

○とゞまらぬ名残だに有雁金は霞の余所に何いそぐ覧

忍涙恋

6 洩さじと思ふ心到下ふかき袖のなみだよ我と添行

○洩さじと思ふ心につゝみても袖のなみだよ我と添行

契待

7 ○偽を余所になしてぞ待れぬる暮ばと契る人の言葉に

〈よろしく候〉

逢後増

8 今迄の心くらべも逢見てぞ真清の鏡面影にたつ

依泪顕

9 ○いつしかと洩て立そふうき中をつゝむ涙の袖のあだ波

恨身

10 ○つれもなき人をしうらむ心こそ我玉の緒の乱れなりけれ

〈珍重く〉

〔奥書〕ナシ